

すごいがいっぱい！「オホーツクの森」

常呂川森林環境保全ふれあいセンター 菊地 浩司

はじめに

常呂川森林環境保全ふれあいセンター（以下、「常呂川ふれあいセンター」という。）の活動フィールドである「オホーツクの森」は、一見、北海道でよく見られる針広混交林（針葉樹人工林含む）であります。しかし、実はたくさんの魅力があるということで、「オホーツクの森」のすごいがいっぱいを今回、ご紹介します。

1 「オホーツクの森」の概要

「オホーツクの森」は、北見市街から車でおよそ 30 分ほどで入り口に到着します。面積は北見市と網走市にまたがる約 3,700ha で、オホーツクの森から流れ出る水は、1 級河川の常呂川や能取湖、網走湖へと注いでいます。森林構成は人工林 56%、天然林 44% となっています。（写真－1）

また、この「オホーツクの森」は昭和 46 年に北見地域における森林施業の総合的な技術の開発と普及、森林のレクリエーションの利用を図るために設定された森でもあります。



写真－1 オホーツクの森の位置図

2 「オホーツクの森」のすごいについて

1) 森林ボランティアの活動

○勉強会等の開催

常呂川ふれあいセンターと関係が深い森林ボランティア「オホーツクの会」は、100 名ほどの会員がおりますが、森林に造詣が深い会員はごく少数であります。その中で、昨年実施した「オホーツクみどり検定」（注 1）をきっかけに、受検に向けて、会員内の自主的勉強会を「オホーツクの森」で行いました。



写真－2 ガイドの様子

また、「オホーツクの会」独自に毎年2回、一般市民を集めて森林散策会を行っておりますが、先の勉強会で今回の「オホーツクみどり検定」の認定者となった会員などが散策会のガイド案内を行うなど独自の進化を遂げています。（写真－2）

○森林整備活動

他の森林ボランティアでも森林整備活動を行われていますが、「オホーツクの会」でも「オホーツクの森」内の遊歩道整備（草刈りや補修）等を毎年、手伝ってもらっており、各施設等の管理に貢献しています。

また、「常呂川森林づくり塾」（注2）においては、「オホーツクの会」の会員の積極的な参加の下、様々な取組みに取り組んでおり、森林づくりの技術習得にも力を入れています。写真－3は天然更新と人為的な更新のプロットを設置して、その違いの調査を体験してもらっているところです。



写真－3 調査の様子

このほかにも、企業や団体等が「オホーツクの森」において森林づくりのボランティア活動を行っており、体験の場となっています。

2) 教育機関との連携

○日本赤十字北海道看護大学

今年度、北見市に所在する日本赤十字北海道看護大学の1年生の総合科目を常呂川ふれあいセンターが受け持つこととなり、初日、森林・林業について講義を行い、翌日、「オホーツクの森」で、カミネッコンを使った植樹体験を行いました。当日は、100名以上の学生が参加し、担当する職員は大変でしたが、担当教官からは次年度以降も継続的な協力を要請されています。（写真－4）



写真－4 植樹の際の説明

この外にも、この大学の生物クラブにおいては、「オホーツクの会」が実施するボランティア活動についても積極的に参加していただいています。

○北海道のオホーツク教育局

オホーツク教育局では新規採用の教員に対する初任者研修を行っており、その研修のうち、「自然観察基礎講座」について、毎年、常呂川ふれあいセンターが依頼を受けて、「オホーツクの森」内で様々なカリキュラムを行い、学校における環境教育に寄与しています。今年度については、19名の教員が受講し、先生の内訳として、養護学校から小・中・高校と幅広い教員が来ました。講座開催に当たっては特に、生徒が自然に興味を

もてるような知識や方法について、工夫しながら伝えております。受講された教員からは授業等に役立てていきたいとのお話を聞いております。

以上のように、「オホーツクの森」は教育機関への貢献の場としても利用されています。



写真－5 アイスブレイクの体験

3) 「オホーツクの森」の隠れた魅力

○自動撮影による動物調査

「オホーツクの森」では夜間の自動撮影による動物調査を行っております。その結果、写真－6のように、「ジュウジギツネ」が生息していることがわかりました。この「ジュウジギツネ」は毛が黒・白・茶が混在しているのが特徴で、昔、毛皮用に飼育していたアカギツネの劣性遺伝を受け継いだキタキツネとの交雑種で、生息数は少ないとのこと。（写真－6）このほかにも、やまおやじであるヒグマも写っていました。



写真－6 ジュウジギツネ

○水棲生物調査

「オホーツクの森」では自動撮影による動物調査以外にも、森林から流れ出る水の生物についても調査しました。

この度、「コガタカワシンジュガイ」という絶滅危惧Ⅰ類の生物が生息していることがわかりました。（写真－7）この他にも「シベリヤヤツメ」という北海道レッドデータブックでの希少種に指定されている種も見つかりました。



写真－7 コガタカワシンジュガイ

また、「ムカシトンボ」のヤゴも生息しており、このトンボは生きている化石ともいわれ、幼虫期間が6～8年と長いことも考慮すると、「オホーツクの森」の沢水は水量が安定していることの現れと考えられます。

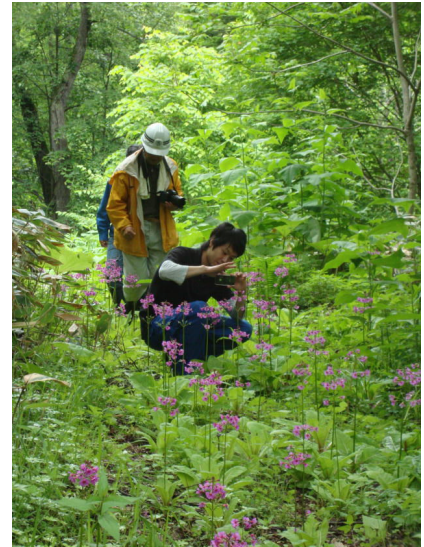
以上のように、「オホーツクの森」は生物多様性に富んでいる森林であることがよくわかりました。

4) その他の魅力

「オホーツクの森」内はかなり施設が充実しています。例えば、遊歩道もたくさんルートがあり、途中には木製の展望台もあり、網走湖を望むことができます。

また、「古（いにしえ）の森」という原生林を思わせる巨樹が見られる天然林もあり、そこでは様々な樹種が見られ、樹木の勉強ができます。その他にも、お花畑といわれる所もあり、例えば、クリンソウという花がたくさん咲く箇所があり、とてもきれいです。（写真－8）津別町では「クリンソウ祭り」を行っております。

このように、隠れた名所もあり、当然、山菜やキノコも採れますので、レクリエーションの場として、非常に楽しめる場所であります。



写真－8 クリンソウ

3 「オホーツクの森」の今後について

次に、先に挙げた「オホーツクの森」の魅力を受けて、今後の展開等を検証していきます。

1) 森林ボランティア団体

自主的に勉強会を行うなど、ガイドもできる人材が増えてきています。また、今年度実施した「オホーツクの森」でのボランティア植樹箇所の事前下草刈りも「オホーツクの会」で実施していただくなど、森林づくりの実力もかなり付いてきています。そこで、今後はもっと活躍できる場を「イベント実施に係るサポート活動及び支援に関する協定」などを活用しながら、提供していきたいと考えます。

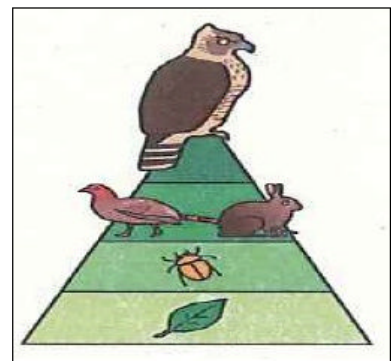
2) 教育機関との連携

今回例示した大学との関係では、せっかく森林とふれあった学生は卒業すると北見市を離れてしまうことが多い状況です。そこで、担当教官とも連携しながら、今後も新入学生ともつながっていくような、継続的な取り組みとしていきたいと考えます。

3) 生物多様性

「オホーツクの森」でのアンブレラ種（注3）では、ヒグマが生息しているのは自動撮影による動物調査で把握しました。しかし、その他のアンブレラ種、例えば猛禽類については、どのような種が生息しているかはまだ、不明であります。

特に、知床地域では保護活動もあり、「シマフクロウ」が生息域を広げていると聞いているところであります。また、「クマタカ」も森林性の猛禽類でありますことを考えると、意外と生息しているかも知れません。専門家の意見も聞きながら、把握に努めていきたいと考えます。



図－1 アンブレラ種

4) 施設等の活用

「オホーツクの森」の名前はかなり市民に浸透してきていますが、実際に現地へ行くという方は少ない状況です。せつかく、近くに、施設が充実して、しかも、自然の山を感じられる場所となっているので、もっとPR活動を工夫していきたいと考えます。

おわりに

4月からの国有林の一般会計化に向けて、ますますふれあいの場としての「オホーツクの森」は重要となります。また、一方、森林・林業再生プランを進めるに当たって、森林・林業を理解してもらい、ひとりでも多くのファンが増えるような企画も考えていくことも重要と考えております。今後も常呂川ふれあいセンターとして、多方面にPR等を行うよう努力していきたいと考えています。

注1) 「オホーツクみどり検定」：オホーツクみどりネットワークが主催し、オホーツク地域限定のご当地検定で、地域住民にみどりに関心を持ってもらい、ゆくゆくは緑に関するガイドを育てていくことを目的としている。検定は「基礎編」と「ガイド編」の2種類がある。

注2) 「常呂川森林づくり塾」：常呂川ふれあいセンターが主催し、一般公募した者を様々な体験を通して、基礎的な森林づくりの技術を習得してもらい、今後の森林ボランティア活動の中心的人材を育成していく。

注3) 「アンブレラ種」：その地域における食物連鎖の頂点にいるほ乳類や猛禽類のことで、この種が生息していることは生態系ピラミッドの下位にいる動植物も豊富であり、そのため、生物多様性が守られている地域と考えられる。